

## ■ PCN だより

### PCN Volume 63, Number 2 の紹介 (その2)

先月号では、2009年4月発行のPCN Vol. 63, No. 2に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

#### PCN Frontier Review Article

Oxytocin, sexually dimorphic features of the social brain, and autism

*H. Yamasue, H. Kuwabara, Y. Kawakubo and K. Kasai*

オキシトシンと社会脳領域の男女差、そして自閉症への関与

代表的な広汎性発達障害である自閉症スペクトラム障害では、強い遺伝要因の関与が明らかにされているものの、多因子遺伝で異種性も指摘され、これまで候補遺伝子が明らかにされていない。この自閉症スペクトラム障害に共通する特徴として、互恵的で相互的な対人関係を形成することの重度の障害、扁桃体や紡錘状回および上側頭溝や後部下前頭回などのいわゆる社会脳領域の機能的・形態学的障害、そして疫学的に女性に少ないという男女差があげられる。一方で健常者の精神機能の中でも、情動記憶や社会相互性の形成などには男女差が報告されている。さらに最近の脳画像研究では、社会認知過程の脳基盤にも男女差を報告している。また近年では、オキシトシンやバソプレッシン、そしてX染色体上の遺伝子など、男女差のある物質が、社会認知などの精神発達に関与しているという点から脚光を浴びている。これらの近年蓄積されてきた知見を総合すると、自閉症

スペクトラム障害の持つ、対人相互性の障害、社会脳領域の機能的・形態学的障害、そして疫学的に女性に少ないという男女差、という特徴のいずれもが、社会相互性と結びついた男女差のある物質の関与で形成されているという仮説が導かれる。本総説では、まずはじめに自閉症スペクトラム障害の臨床的特徴に存在する男女差、健常者における社会認知の男女差、そして社会脳領域の機能や形態の男女差、などを報告している文献を概観した。さらに、オキシトシン自体の男女差や、オキシトシンと社会相互性やその脳基盤との関連、自閉症スペクトラム障害の病態・病因との関連を指摘する知見を要約した。こうして最近の研究をまとめると、オキシトシンは実験動物レベルで社会性や愛着形成に重要な役割を果たし、健常成人でも対人交渉能力の促進に役立ち、そして自閉症スペクトラム障害の病態や病因にも関与することが示唆されている。

#### Regular Article

1. Stigma associated with schizophrenia : Cultural comparison of social distance in Japan and China

*K. Haraguchi, M. Maeda, X. M. Yan and N. Uchimura*

統合失調症に対するスティグマの構造：日本と中国における社会的距離の文化比較

【目的】本研究の目的は、日本と中国の統合失調症に対する社会的距離について、精神医学的知識と社会文化的要因から検討し、統合失調症に対するスティグマの構造を比較検討することである。

【方法】福岡県内の354名の日本人と北京在住の347名の中国人を対象に、日本語版社会的距離尺度(The Japanese language version of Scale Distance Scale; SDSJ)と疾病・薬物知識度調査(Knowledge of Illness and Drugs Inventory; KIDI)を用い、両都市の統合失調症に対する社会的距離と精神医学的知識を比較検討した。SDSJは、統合失調症に対する社会的距離を8項目の質問で評価する自記式の4段階のLikert scaleで、得点が高くなるほど社会的距離が遠くなるように設定されている。KIDIは、疾病と薬物に関する20項目の質問(正解か誤答)によって精神医学的知識を測定するもので、得点が高いほど知識が高くなる。北京での調査では、両尺度を中国語に翻訳したものを用いた。【結果】両都市の統合失調症に対する社会的距離はともに高かったが、北京でより社会的距離が高かった。【考察】精神医学的知識は北京で低く、両都市の統合失調症に対するスティグマの構造に違いがあることが示唆された。社会文化の面からそのスティグマ構造を明らかにし、スティグマを払拭していくための構造を明らかにすることが重要である。

## 2. Psychological features and coping styles in patients with chronic pain

*J. Cui, E. Matsushima, K. Aso, A. Masuda and K. Makita*

### 慢性疼痛患者の心理特性と対処方法

【目的】慢性疼痛の発現、持続または増幅に関しては、心理的要因が極めて重要な役割をもつと言われている。こうしたことから、本研究は慢性疼痛に関連した患者の心理特性や対処方法を検討することを目的とした。【方法】2005年12月から2007年3月の間に、ペインクリニック外来を初診した患者のうち、少なくとも3ヵ月以上疼痛が持続していた症例63名(平均年齢59.3歳;男性22名,女性41名)を対象に、アンケート調査を実施した。慢性疼痛に関しては、疼痛の持続をその持続期間で、疼痛の強度をVAS(視覚的疼

痛評価スケール)によって評価した。また、心理特性についてはProfile of Mood States (POMS)で、対処方法はCoping Inventory for Stressful Situations (CISS)で測定した。【結果】疼痛持続時間はPOMSやCISSの得点と有意な相関を認めなかった。疼痛の強度と心理特性および対処方法との関係をみたところ、VASの値はPOMSのTA尺度(緊張・不安)、AH尺度(怒り・敵意)およびF尺度(疲労)と有意な正の相関を示した。さらに、VASの値がCISSのA尺度(回避優先対処)と有意な負の相関を示した。【結論】慢性疼痛患者を治療する上で、こうした心理特性や対処方法を理解することは、臨床上大いに役に立つことが示唆された。

## 3. Differences in frontal lobe function between violent and nonviolent conduct disorder in male adolescents

*H. Miura*

### 男子思春期行為障害少年の暴力性の有無による前頭葉機能の差異

【目的】男子思春期行為障害少年の暴力的な群と非暴力的な群の間の前頭葉機能の差異を研究することが本研究の目的である。【方法】研究に参加したのは名古屋少年鑑別所に入所した総数309名の男子思春期少年である。参加者は以下の2群に分けられた、一方の暴力群は他人に暴力を加えた者で構成され、もう一方は非暴力群である。被験者はウィスコンシン・カード・ソーティング・テスト(慶応バージョン:KWCST)とアイオワ・ギャンプリング・タスクを受けた。暴力事件となることを、年齢、家族歴(犯罪、薬物乱用/依存、アルコール関連障害、および精神科治療)、両親または養育責任者からの虐待の経験について、KWCTの達成カテゴリー数(CA)について( $\leq 4$ ,  $> 4$ )、アイオワ・ギャンプリング・タスクの不利益カードの総選択回数について( $\geq 50 < 50$ )とともに分析した。【結果】多変量ロジスティック解析によって薬物乱用/依存の家族歴(オ

ッズ比=0.3, 95%信頼区間=0.1-0.9) および KWCST における CA (オッズ比=1.8, 95%信頼区間=1.0-3.1) が有意に暴力と関係することが明らかになった。【結論】思春期男子行為障害において KWCST における CA 得点が低いことは暴力と関係したが、薬物乱用/依存の家族歴は非暴力と関係することが明らかになった。

#### 4. Identification of predictors of post-ictal delirium after electroconvulsive therapy A. Kikuchi, N. Yasui-Furukori, A. Fujii, H. Katagai and S. Kaneko

電気けいれん療法における発作後せん妄のリスクファクター

【目的】電気けいれん療法 (ECT) 後にしばしば発作後せん妄 (PID) が認められ治療と対応を要する。PID に対する適切な管理は安全な ECT のために必要である。しかしながら、PID の明らかになりリスクファクターはこれまでに報告されていない。本研究では、PID を認めた患者の臨床的特徴を検討し、PID の予測因子を同定した。

【方法】ECT を 4 セッション以上行った 50 人の患者を対象とした。通電にはサイン波または短パルス矩形波治療器を用いた。けいれん後 30 分間、PID の観察を行った。PID の重症度を 4 段階に分けて評価した (なし, 軽度, 中等度また重度の PID)。年齢, 性別, 罹病期間, 診断, 臨床症状 (精神病症状あるいは緊張病症状の有無) および刺激波形 (サイン波または短パルス矩形波) といった各臨床因子と PID 重症度の関係を解析した。

【結果】中等度から重度の PID が認められた患者は 18 人であり, 発症頻度は 36%であった。重度 PID のほとんどの患者に, 1~2 mg/kg のプロポフォール単回静脈内投与が有効であった。治療前に緊張病症状を呈していた患者群では 88%と高頻度に PID が認められ, 緊張病症状が認められなかった患者群では 24%のみであり, 統計学的に有意差を認めた ( $P < 0.01$ , フィッシャーの直接法)。各臨床因子と PID の重症度を重回帰分析

により検討した結果, 緊張病症状の存在は PID の重症度と相関していた ( $\beta = 0.428$ ,  $P < 0.01$ )。【結論】ECT 前の緊張病症状の存在は PID の予測因子である。プロポフォールは PID の治療に有用である。

#### 5. Relationship of hypersensitivity to anxiety and depression in children with high-functioning pervasive developmental disorders

H. Tsuji, D. Miyawaki, T. Kawaguchi, N. Matsu-shima, A. Horino, K. Takahashi, F. Suzuki and N. Kiriike

高機能広汎性発達障害児における感覚過敏性と不安および抑うつとの関係

【目的】広汎性発達障害 (PDD) 者は, 感覚過敏性や感覚鈍麻を含む, 感覚とその知覚における異常を有することが, 多くの研究者によって明らかにされている。感覚過敏性は, 感覚鈍磨に比べて PDD 患者の日常生活により大きな影響がある。本研究の目的は, 学童期の PDD 児における感覚過敏性と不安, 抑うつとその他の精神病理との関連を明らかにすることである。【方法】64 人の高機能広汎性発達障害児を, 感覚過敏性を有する群 (hypersensitivity group: HG;  $n = 43$ ) と, 感覚過敏性を持たない群 (non-hypersensitivity group: non-HG;  $n = 21$ ) に分け, Child Behavior Checklist (CBCL), State Trait Anxiety Inventory for Children (STAIC), Children's Depression Inventory (CDI) を用いて不安, 抑うつとその他の精神病理について比較した。【結果】HG 群は, non-HG 群に比べ, CBCL において総得点, 内向得点, 身体的訴えについて有意に高い得点を示した。また STAIC における総得点, 状態不安の得点, 特性不安の得点の平均得点は, HG 群が non-HG 群より高い傾向を示したが, 有意水準には至らなかった。CDI の得点は, HG 群が non-HG 群よりも有意に高い得点を示した。【結論】感覚過敏性を有する PDD 児はより重篤な精神病理, 特に抑うつを含む内在化障害

を持つことがわかった。

### Short Communication

1. Impact of psychiatric morbidity on quality of life after motor vehicle accident at 1-month follow up

*Y. Matsuoka, D. Nishi, S. Nakajima, N. Yonemoto, H. Noguchi, Y. Otomo and Y. Kim*

交通外傷後1ヶ月時点における精神的苦痛と Quality of Life との関連

【目的】我われは、交通外傷患者の精神健康に関するコホート研究を2004年5月より実施している。この度、交通外傷後早期の精神的苦痛の有無と Quality of Life (QOL) との関連について検討した。【対象】多摩地区の救命救急センターに入院した18歳以上70歳未満の交通外傷患者を連続サンプリングした。外傷性脳損傷、希死念慮、治療中の精神疾患・神経疾患、認知機能低下を有するものは除外した。先の研究報告対象者 (Matsuoka et al, Crit Care Med, 2008) のうち、事故後1ヶ月の診断面接と QOL 評価を完遂した95名 (精神的苦痛あり群30名, なし群65名) を解析対象とした。【方法】事故後1ヶ月の精神的苦痛は Mini-International Neuropsychiatric Interview と Clinician-Administered PTSD Scale, QOL は Medical Outcomes Study 36-Item Short Form Health Survey (SF-36) で評価した。統計解析にはウィルコクソン順位和検定を用いた。【結果】身体外傷重症度は、精神的苦痛あり群となし群の間に有意な差が認められなかった (Injury Severity Score は二群とも中央値が9点)。しかし、SF-36 で評価した QOL の多くの領域 (身体の日常役割機能, 痛み, 全体的健康感, 活力, 精神の日常役割機能, 心の健康) において精神的苦痛あり群がなし群よりも有意に低値であった。【考察】交通外傷後に精神的苦痛を有するものは、QOL も低いことが示された。デザイン上の制約から因果関係は不明である。ただ、交通外傷患者のヘルスケアに携わるものは、患者

の精神的苦痛と、主観的な身体的健康感との両方を重視した健康回復支援を行っていく必要があることが示唆された。

2. Comparative study of the prevalence of suicidal behavior and sexual abuse history in delinquent and non-delinquent adolescents

*T. Matsumoto, A. Tsutsumi, T. Izutsu, F. Imamura, Y. Chiba and T. Takeshima*

非行少年における自殺関連行動と性被害体験率：一般高校生との比較研究

本研究では、年齢と地域を一致させた15~17歳の非行少年 (少年鑑別所・少年院の被收容者) と一般高校生の男女とのあいだで、自記式質問票を用いて自殺関連行動 (自傷行為, 自殺念慮, 自殺企図) と性被害体験の経験率に関する情報を収集し、これらを比較した。その結果、非行少年では、一般高校生に比べて、自殺関連行動と性被害体験の経験が高率に認められ、特にその傾向は女性で顕著であった。

3. Utility of the Kyoto Scale of Psychological Development in cognitive assessment of children with pervasive developmental disorders

*T. Koyama, H. Osada, H. Tsujii and H. Kurita*

広汎性発達障害児の認知評価における新版K式発達検査の有用性

広汎性発達障害 (PDD) 児74人 (平均45.2か月, 男62) の臨床記録に基づき、年少PDD児の認知評価における新版K式発達検査の有用性を調べた。発達指数 (DQ) のうち、全DQはIQと最も高く相関 ( $r, 0.88$ ) し、認知・適応DQはIQと平均に有意差がなく (65.8と66.4)、両者はIQの代用値として有用そうである。同検査は、継続的な発達評価と、早期の適切な療育プログラム提供を可能にするだろう。

4. Survey of benzodiazepine and antidepressant use in outpatients with mood disorders in Japan

*H. Uchida, T. Suzuki, D. C. Mamo, B. H. Mulsant, K. Tsunoda, H. Takeuchi, T. Kikuchi, S. Nakajima, K. Nomura, M. Tomita, K. Watanabe and H. Kashima*

日本における気分障害外来患者に対するベンゾジアゼピンおよび抗うつ薬の処方調査

気分障害患者におけるベンゾジアゼピン使用に

関するデータは、特に高齢者においていまだ少ない。気分障害を有する外来患者 948 名〔男性 405 名、年齢 16~91 歳 (平均 52 歳)〕を対象とした横断処方調査を日本で行った。ベンゾジアゼピン系抗不安薬は全ての年代で約 60% の割合で処方されており、年代間の差はなかった。ベンゾジアゼピンの頻用は、特に高齢者において副作用が多いことが知られている事を鑑みるに、懸念されなくてはならない。

(精神神経学雑誌編集委員会)

---